

# 創建

そうこん

巻頭言:渡部和生	・1
コンペと卒業設計	・2~4
大学院特別講義(十亀昭人先生):川崎浩長	・5
工学部学術研究発表会	・6
卒業論文発表会/修士論文発表会	
卒業設計発表会、卒業生・修了生表彰者	・7
研究発表/教室ニュース	・8

2022・3・20 VOL. 56 NO. 3 (通巻179号)

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

私は大学卒業直後に生き方を変える、忘れられないエピソードに出会いました。仙台の建築設計事務所に入社して一年も経たないうちに、郡山市内の大病院の増改築の現場にて常駐監理することになりました。設計の実務も修得していない私が、複雑な病院建築の現場監理などできるわけがありません。毎日工事現場に通い、日中は図面と現場を見比べ、わからない所は逆に施工会社の方に教えて頂き、最も難解だった設備関係の図面については、現場事務所で特別に解説して頂く「夜学」を始めました。色鉛筆で配管やダクトを一本ずつ色分けし、翌日は疑問点を質問しました。この設計者と施工者の関係の本末転倒と言える状況には、施工会社の方も疲れ果てたようですが、辛抱強く丁寧に教えてくれました。こんな環境にも慣れ、図面の実務用語と現場での実物との繋がりがだんだん理解できるようになりました。

この工事は新築ではなく、既存建物を使いながらの増改築工事であったので、様々な調整は困難を極めました。私の日頃の行いが悪いせいか、竣工直前に郡山には珍しく大雪となり、大停電が発生しました。病院側も工事側も自家発電設備が頼りです。施工会社からはその電源の一部を工事現場にまわしていただけないと、駅前の本院から患者が移送できず、最終目的の本院改造工事が間に合わないと言われました。既存病院の職員の方々は、患者さんを優先し、すべての非常用電源を病院内で使いたいという当然の主張をされました。レンタルの自家発電設備は既に足りない状況であり、大学卒業したの私にとって、監督員としての難しい判断を迫られ、どちらを選択するか大いに悩みました。

そこで発電機は水冷式だったので、人力

で水を足して限界水温より低い温度の水で稼働させ、過熱によるトラブルを避けました。結果的には、既存病院と工事現場の双方に電源を供給する両面作戦を決断したのです。今思うと過信があったかもしれませんが、技術の力を信じる事を選んだのです。

増築建物は無事竣工し、本院の患者さんの一部を移して、いよいよ最終目標である、救命救急センターを既存建物の上層階に、下層階に患者さんが入院している状態で完成させるという無謀ともいえる改修に着手しました。

下階には産婦人科と小児科が満床で埋まっていた。上部救命センターの床下配管は入院患者の頭上の施工になります。既存建物なので構造体は動かさず、設計図は

## 「目からウロコが落ちた時」

### —— 建築家としてスタート ——

特任教授 渡部 和生

整然と書いてありますが、現場は野戦病院のようになりました。私は各部門の担当者から厳しく叱責されました。1平米のゆとりもない中で、病気の子供たちのために院内学級をつくる話が追加され、各部門に再度お願いを続け、何とか小さな教室が救命救急センターと同時に竣工しました。やっとの思いで、完成した院内学級はささやかな黒板だけがある小部屋で、苦勞が報われたというより、寂しさが漂う部屋で、苦勞した割には…と感じました。しかしその後、院内学級を訪ねてみると、3~4名の病気の子供たちが一生懸命に病と闘いながら勉強していました。その瞬間、それまで冷静を装っていた私の「目からウロコが落ち」胸が熱くなりました。実はあまりに辛くて設計を辞める決意をしていた

私の中で何かが変わり、設計を続ける意志が再生されました。「目からウロコが落ちた」(以下、目からウロコ事件)状態というのは、このようなことなのでしょう。建築はそこでの人間の営みとの関係が何よりも大切であるという初歩的なことに立ち返ることができました。

いよいよ独立して事務所をつくることになり、奇しくも作品第一号は、前述した病院の院内保育園を設計することとなり、さっそく建築専門誌「新建築」に掲載されました。二作目は同病院の職員宿舎と院内保育園の合築で「東北建築賞」などを受賞しました。しばらくして、当時の本学部建築学科教授、佐藤平先生が審査委員長を務められたコンペティションで福島県立郡山支援学校を設計する機会が与えられました。既存校舎を使いながら、現有敷地で1万4千平米もの建築を全面改築する大仕事でした。

設計に先立って、設計スタッフ全員が肢体不自由の生徒さんの寄宿舎に泊まり込み、共に生活したことも、前述した院内学級完成時の「目からウロコ事件」が根強く私の支えとなり、ワークショップで人手が足りないとすると、本学部建築学科の学生さんたちが助けてくださいました。この建築は運にも恵まれ、日本建築学会賞(作品)を受賞しました。

大学卒業直後、院内学級で学ぶ病気の子供たちを見た時の「目からウロコ事件」は私の建築家として歩む道程を決定付ける支柱となったようです。

学生の皆さんは、「目からウロコが落ちる」出来事にこれから出会うのではないのでしょうか。ひょっとするとそれは、ささやかな、小さなエピソードとして見逃してしまうかもしれません。

学生の皆さんには様々な未来が広がっています。それぞれの方にとって、人生の支えとなる出来事にいろいろな場面で、これから出会えることを心から願っております。

## コンペと卒業設計

JSCA 構造アイデアコンペに参加して  
建築学科4年 ○佐藤温起、高野慎也、田村泰誠

今回、私たちが参加したのはJSCA(建築構造技術者協会)が主催した構造アイデアコンペ「アイス棒タワーコンテスト」です。市販のアイス棒を使用してタワーを作成し、構造的な性能だけでなく、造形物としての美しさを競います。コンペの規定は、タワーの高さは1m以上とし、500gの錘を頂部に付加した後、震度4以上に対する耐震性能を評価するもので、これらの模型を加振当日に作成する必要がありました。



コンペは、書面審査となる「一次審査」と現物審査となる「予選会」、「本選会」の三段階で審査されます。一次審査を通過した私たちは、全員で予選会会場に向かいました。当日は、主に午前と午後のプログラムに分けられ、午前の3時間でタワーを組み立て、午後は振動台に乗せて加振します。全40チームを5チームずつのグループに分けて競うことになりました。加振が始まると、予定の震度4に相当する模擬地震動に対してもびくともしないタワーが続出したこともあり、規定が変更され、最終的に、入力される模擬地震動は、震度5強相当にまで上がりました。

私たち3人の考えが共通していた点は、コンペの準備を進めるうえで良い方向に働いたと思っています。勝つためにというよりは、面白そうだからというのが共通する一番の動機でした。最初は、単にアイス棒を組み合わせることですら苦労を重ねたことが印象的です。一段目は簡単だけど、高さが二段目三段目…と層を上を組み上げるのは難しい。部材に切り込みを入れたものを、ああでもないこうでもないと適当に組み合わせていたら、徐々に形になっていったように、最初はみんなで遊んでいるような感じでした。

このように、試行錯誤を繰り返して進めていき、最終的には、高野くんの案をベースに進めることにしました。この段階で、高野くん陣頭指揮をとってもらうことになったのですが、最初は思うように説明を理解できずお互いの考えが伝わらずに苦労しました。振り返ると、適切に考えを共有するという意識疎通の難しさを改めて体感した場面でもあります。徐々に震度が上げられ、さらには錘の重量も増やされる中、私たちの作品は最後まで自立し続けたものの、惜しくも本選へ進出することはできませんでした。その後の反省では、耐震性能というよりは造形美の点で大きく減点されたことが要因であったと分析しています。

構造系のコンペは、意匠系のコンペと比べて開催数が少なく、自分たちの力量を試す機会が少ないという現状があります。このような少ない機会を経験できたこと、また、このコンペで経験したことを進学する大学院の生活で生かしていきたいと思っています。

卒業設計とその後  
博士前期課程1年 奥山翔太

## 卒業設計に向けて

まずテーマを決めなければなりません。漠然と考えても何も見えてこないで、まず的を絞ろうと、敷地の選定から始めました。最初は卒業設計のための敷地を考えるのですが、浦部先生とのエスキスを繰り返す中で、それに違和感を覚えるようになりました。つまり、建築は人のために設計するはずですが、卒業設計も基本的には同じではないか、ということです。私は岩手県で生まれ育ち、小学校のころは沿岸部を訪れることが多く、海辺の街の風景は記憶にありました。6年生のときに震災があり、街の風景ががらりと変わってしまいました。いざ再建というときに堤防ができ、街の風景に馴染まないスケールの大きな構造物は、違和感を覚えました。

## 卒業設計に取り組む

岩手県の沿岸部という敷地で、堤防という対象を定め、設計を本格的にスタートさせました。堤防に穴を開けて内陸と沿岸を繋ぐという強引な案、堤防自体に何かを付け足す案、などいろいろと案を出しましたが、いまち自分がやりたいことは違うと感じていました。また、現実に堤防のかさ上げが検討されていて、ますます海と街とのスケールにギャップが生じ、関係性が希薄になると思いました。別の案はないかということで、浦部先生と相談を続ける中で、堤防と同じ効果があるけれども既存の堤防とは異なる新しい何かを作ろうという考えに至りました。それは、一つの大きな壁を複数の壁かなる群に変換して、同じような効果を維持させつつ地域のスケールにあった減災のあり方を提案できるのではないか、ということです。

方向性が定まり、作業を進めていくことになります。現地を訪れたのは3回でしたが、必要な知識を本で調べたり論文を読んだりして情報を収集していました。これは、社会的な問題からアプローチすることを目指していたからです。夏期休業に入る前くらいにそれぞれテーマを決め、後学期が始まった秋頃から本格手にエスキスが始まります。二週間に一回のペースで全員が研究室に集まり、半日くらいのエスキスが行われます。浦部先生とのディスカッションを繰り返しながら、徐々に自分のペースで作業を進めていきます。

エスキスでは、設計の大枠を捉えることを指摘されました。それは、提案の内容にストーリーをしっかり持たせるということに繋がります。一方で、形を決めるのには苦労して、時間が掛かりました。建築的なスケールと土木的なスケールの両方を扱わなければならない、難しかったです。最初はなんとかひねり出そうとしていたのですが、それまでに自分の中にアイデアの引出を増やすためのインプットが足りず、形にならない日々が続いていました。そこで、雑誌などを参考にスケッチを多く行い、手を動かし続けることでデザインの検討を重ねました。この作業に一番多くの時間を割いて取り組んだ自負があります。

## 卒業設計を終えて

提出した直後には達成感はありませんでしたが、まだまだできたという悔しい気持ちもありました。図面の密度が足りなかったという点で、形はできたけれど中身がないというか、表現仕切れておらず、またストーリーの説明ももっとわかりやすくてきたのではないかと思います。そのような思いはありますが、卒業設計を完成させられたのは後輩たちに模型を手伝ってもらったおかげであり、一人ではとてもできなかったと思います。

## コンペに参加する

コンペに参加したことについて、そもそも卒業設計に取り組むときから、学外に出そうと決めていました。当然ですが、学内の評価は学内だけの限られた範囲のものであり、学外に出せばまた違った評価を得ることができます。また、他大学の学生の作品も見てみたかったという思いもありました。更に、4年生の前期に選抜されなかったことが悔しかったという記憶もあります(4年次生の前期には、学内で選抜された学生の作品が、学外にコンペに出品される機会がある)。そういったことから、学外のそのような場で成果を出すためにはどうしたらよいかという問題意識を持って、卒業設計をやっていました。負けず嫌いなので、賞を取るつもりでした。

卒業設計での反省を踏まえて、説明し切れていない部分や質問されて返答に窮した部分など、作品を改善した上で三つの異なるテーマのコンペに応募しました。一つは防災、一つはフェーズフリー、一つは歴史、それぞれのコンペの異なる特徴を合わせることで、トータルでよりよい作品に仕上げ直すことができると目論見ました。結果的に、二つのコンペで受賞することができました。

## 大学院へ進学する

大学院に進学した理由は、就活がうまくいかなかったのが直接的な動機ですが、もう少し勉強して知識を蓄えて設計という仕事をしてもいいかなと思ってもあったためです。大学院生の生活は思ったより忙しく、自発的にコンペに出しているからでもあるのですが、授業もしっかりあるという印象です。けれども、かなり有意義に時間を過ごせているとも感じています。就職して仕事をしている自分を想像して比較してみたときに、おそらく自分自身のこと、自分はどういう人間なのかということ、じっくり考えることができているだろうと思います。

## 大学院生の学び

卒業設計は転換期で、前後で設計に対する考え方が変わりました。学部生のときは、ただものを作る、単に造形を操作する、という設計の仕方でした。けれども、そうではないと卒業設計を通じて感じ、設計に対して事前の調査やストーリーの設定や地域の人の存在など、さまざまなことを念頭にしながら設計するということをしかりと勉

強できているのは、大学院生になってからの収穫です。仕事を始めればおそらくそのような学びの時間はなかなか取れないだろうと思うので、現在は準備期間に充てられています。そのような学びの時間は、コンペをきっかけに持つようになっています。コンペの存在がとても大きいです。自分の考えを一つのプレゼンボードにまとめ、自分が足りない部分は他の作品を参照して吸収し、コンペを通じて成長することができています。

## 卒業設計を振り返って

もともと設計する仕事を目指して建築学科に入り、けれども設計とは何かということがいまち分からずに1～3年生を過ごし、4年生の前期でなんとなく理解することができ始めました。卒業設計でストーリーを立てて設計することの重要性に気が付き、浦部先生の教えもあって、設計の仕事を目指す上で卒業設計は大きなターニングポイントになるだろうことを実感しています。その成果をまとめ直し、コンペに作品として応募した結果、いろいろな賞をいただいたことも自信に繋がりました。

卒業設計を終えた今、建物の見え方が変わっていることに気が付きます。例えば、防災のことに目がいくようになり、自分以外の人の防災に対する考えも分かるようになりました。つまり、防災に関するさまざまなものやことが街の中にはたくさんあって、それが見えてくるのです。このような広い視野を得ることができたのは、卒業設計で得ることができました。



## 卒業設計とその後

### 眞船峻

1990年	福島県生まれ
2017年	日本大学工学部建築学科卒業(コンピュータシミュレーション応用力学研究室) 卒業設計で桜建賞受賞
2019年	東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了(構造計画 第1研究室)
現在	株式会社 KAP 勤務

「卒業設計とその後」というテーマを頂き、建築学科の集大成とも呼べる卒業設計について私の経験を書きたいと思います。はじめに触れておきますが、卒業設計は(論文も含め)様々なテーマがありますので、こうあるべきと言うわけではなく、あくまで私の経験に基づく一例である事をご了承ください。

### はじめに

卒業設計を説明する前に私が建築を学び始めた頃についてお話させてください。2011年3月11日に起きた東日本大震災を経験し、当たり前前の日常が実は当たり前では無い事に気付き、今までの生活を捉え直す必要があると当時は感じていました。その時抱いた想いを人の営みに語りかけるにはどうしたら良いのかと藻掻いている時に、建築に出会い工学部建築学科に入学しました。暮らしと建築は不可分の関係であり、今思えば震災当時に感じた事を日々の生活や自分事に落とし込む作業から始めたのが卒業設計だったのかもかもしれません。

### 卒業設計

卒業設計のタイトルは『土地の楔——木を通した循環型システムの構造体——』というものです。概要を説明しますと、福島県を中心に位置する湖南町という山間地域で、山の麓に製材所と事務所建築を計画し、木材の循環を通して里山や林業をもう一度捉え直すプログラムを提案しました。今後地方都市は自立という名の新たなエネルギーのサブシステムの構築が小さな範囲でおこなわれるべきで、その軸となるものが木材であり、製材所や建築が環境循環システムの一環を担う計画をしています。コンセプトを練る前に、福島県の大中小の製材所を訪ねては製材工程や様々な製材機械をリサーチし、また製材所だけでなく林業についても地元の組合にヒアリングを重ねました。対象範囲は幅広く到底卒業設計では扱いきれないのですが、子供の頃によく遊んだ地元の山を捉え直す良いきっかけとなりました。現在日本の里山には戦後の造成林計画で太い幹を持つ木が沢山ある中で、計画地は急峻な山で人の管理が行き届いていない箇所もあり、小径木や根曲がり材(ある意味

弱点のある木)も多く見られます[図1]。使える木は市街地に、弱点のある木は今回の計画で用いるといった素材から設計をスタートさせました。小径木は断面を挽板で薄くし、それを重ね合わせることで製材工場のスパンのある空間を設計しています[図2]。

### 現在の立場からの振り返り

卒業後は大学院に進学し、ある授業で気づかされました。卒業設計は、水をもう一つテーマにしていたという事です。上流の里山を考えることは麓の村を流れる水脈の保全にも繋がります。その水脈は猪苗代湖に注がれ市街地に繋がり、大きな水系を捉えれば太平洋や日本海の水の保全まで考えられます。水のスケールを軸にし、暮らしに必要なインフラを造れたら、環境に意識が繋がるのではと思ひ、修了制作では建築の構造材にもならない小さな木枝から全長16m(最大スパン12.5m)原寸スケールの橋を制作しました[図3]。現在は構造設計事務所に勤務し、卒業後も一貫して、素材の持つ特性を把握し組合せ、時には身体を動かしながら、様々な外力に対し五感使って、かたちを設計しています。

### 最後に

世界中で蔓延するウイルスや自然災害(これを執筆している時には某国の軍事侵攻)など、毎年どこかで暮らしを揺るがす事が起きています。冒頭に述べた昨日までの日常は実は当たり前では無い事は、現代に生きる私たちにも想像に難くないでしょう。革命的な特効薬ではなく、その土地に合わせた解決策の一例として、手にした素材から、山——川——湖——市街地——遠い海まで続く大きなスケールサイズ、言いかえれば日常の先にある世界との関係性に意識を働かせることが、震災後に抱いた想いへの、私が描く答えのひとつです。このようなテーマに出会うと正解というのはなく、日常に溢れるノイズを掬い上げるような作業にも近いので、卒業後も実務をやりながら日々考え続けています。私は建築の設計を行います。建築に限らず様々なテーマを持った方々と議論を交わしつつ、チームを組む、これからの世の中を築きあげられたらと思ひ私の「卒業設計とその後」を締めたいと思います。



図1: 急峻な山と根曲がり材



図2: 卒業設計 製材所パース



図3: 修了制作「木枝橋」

## 「宇宙建築」(十亀昭人先生)を聴講して

### 大学院博士前期課程2年 川崎 浩長

令和3年12月10日(金)、「宇宙建築」と題して、十亀昭人先生(東海大学工学部建築学科准教授)による大学院特別講義がZoomを用いてオンライン開催され、大学院生、学部生、先生方を含め150名余りが聴講した。

講義は、先生が考案された「ソガメ折り」を中心とした自己紹介から始まった。これは、宇宙での建造物の容易な展開・縮小の実現が期待されている、日本の折り紙文化を活かした技術である。次に本技術を応用した3次元展開建造物や3次元剛体展開建造物について展開と縮小の様子が分かる映像を交えて解説された。また、地上において「展開」を検討した展開空間を有する「展開ハウス002」を紹介された。可動式パネルを用いて空間を上下に間仕切ることにより、用途の変更にも柔軟に対応する。続いて「宇宙建築賞」の優秀作品の紹介とともに、本コンペが宇宙建築に関するアイデアの記録を目的としていることを述べられた後、宇宙建築の現在と今後と題して本分野の発展を祈られた。

本稿執筆当時、私は建築材料学に関する修士学位論文作成の真っ最中であり、また博士後期課程への進学を控えている。そのため本稿では、建築材料学の視点を交えつつ聴講の経緯も併せて報告することにした。

### 1—— 聴講にあたって

本講義を聴講する数日前に受検した一般社団法人全国コンクリート製品協会によるコンクリート製品検定の公式テキストにおいて、ルナ(lunar : 月の)・コンクリートに関する記述を読んでいた。ルナ・コンクリートとは、ISRU(In-Situ Resource Utilization : 現地材料利用)すなわち月で得られる材料を月で加工し使用する手法によって作製が可能な建築材料である。一般的にコンクリートが比較的少ないエネルギーで製造できること、成形が容易であること、そしてなにより宇宙放射線や高温度差、微小重力、隕石の衝突などの厳しい月面環境に耐えうることから、月面での活用が期待されている。ルナ・コンクリートの存在に驚かされるばかりでなく、宇宙探索のその先を見据えた宇宙と建築の掛け算に関する講義をいただけるのとこのことで楽しみで仕方がなかった次第である。

宇宙環境での活用が期待されている建築材料も多岐にわたるため、今後宇宙建築に関する研究は活発になるであろう。

### 2—— 宇宙建築研究の現在

十亀先生は展開建造物に関する研究だけでなく、宇宙での避難に関する研究にも取り組まれている。地球上においても盛んに議論される重要性の高いテーマであり、未来の活動圏の構築に大いに貢献されている。

本学部においても宇宙建築に関する研究が行われている。例えば、ガン ブンタラ ステンリー教授のコンピュータシミュレーション応用力学研究室では、無重力状態での自己釣り合い及び自己展開が可能な建築構造物(テンセグリティ)の研究や宇宙への建造物運搬の簡易化を目的とした数値的折り紙作成法による空間構造形態創生に関する研究が行われている。私の所属するバリーク サンジェイ教授率いる鉄筋コンクリート(RC)構造・材料研究室においても、宇宙環境の大きな特徴のひとつである極高低温環境における各種建築材料の力学的検討が行われている。

### 3—— 宇宙建築研究のこれから

講義の中で紹介された、先生自身が顧問を務める株式会社 OUTSENSEの「あなたをどこにでも住めるようにする。そう、それが宇宙でもね。」の言葉は執筆時点でも一字一句違えることなく復唱できるほどに印象に残っている。また、「地球生命の進化の歴史は、活動圏拡大の歴史である。穏やかな海からとても過酷な環境であった陸上へとさらに生存環境を拡大するという選択をした。現在の地球生命を遠く宇宙から眺めてみれば、この小さな惑星に永遠と留まり続けるほうが不自然であり、宇宙へ向かおうとする我々の意志は本能のようにも思えてくる。」としている『日本建築協会：建築と社会, Vol.101, No.1183, pp.10-13, 2020.10』。宇宙進出が我々の運命であるといえる状況では、宇宙と、衣食住において重要な役割を果たす建築の融合は必然である。今後、私が生きているうちに月や火星が地球と並ぶ居住地として認められる可能性はゼロではない。微生物学と建築材料学という学際的研究の一端を担う者として、是非とも宇宙と建築のコラボにも携わりたいものである。



## 研究発表 / 教室ニュース

## 学術論文

- 宮岡大・浦部智義・長内勇樹・滑田崇志「木材熱容量の有効利用による室内温熱環境の向上に関する研究——福島県内の県産材を使用したログハウスを対象として——」『日本太陽エネルギー学会講演論文集(2021)』2021.11, pp.87-90.
- Shear-bond behavior of self-compacting geopolymer concrete to conventional concrete, Purwanto, Ekaputri, J.J., Nuroji, ...Han, A., Gan, B.S., Construction and Building Materials, 2022, 321, 126167, Elsevier
- Carbon Fiber-Reinforced Polymer Rod Embedment Depth Influence on Concrete Strengthening, Han, A.L., Hu, H.-T., Gan, B.S., Hsiao, F.-P., Haryanto, Y., Arabian Journal for Science and Engineering, 2022, Springer
- 速水清孝「大船渡町の防火建築帯指定後の展開」『日本建築学会計画系論文集』Vol.87, No.791, 2022.1, pp.184-194.
- 浦部智義・渡邊洋一「福島県内に現存する地歌舞伎への地域住民の意識に関する研究」『日本建築学会技術報告集』Vol.28, No.68, 2022.2, pp.402-405

## 研究発表

## 第16回 日本建築学会 住宅系研究報告会 / 期日:2021年12月3日(金)・4日(土) | 会場:オンライン開催 (Zoom)

- 郡山市内のサービス付き高齢者向け住宅における入居者ニーズと建築環境の関係性に関する研究  
日本建築学会住宅系研究報告会論文集 16, pp.113-118 ..... ○山田義文・王健嬌

## 教室ニュース

- 廣田篤彦教授は、8月5日、喜多市より、都市計画審議会委員を委嘱され、会長に選出された。
- 市岡綾子専任講師は、11月1日、福島市より福島市公共事業評価委員会委員を再度委嘱された。
- 浦部智義教授と浦部研究室は、11月3日に行われた葛尾大尺屋敷「能・狂言」の舞台・客席の計画・設置と運営を行った。
- 浦部智義教授は、11月6日に行われた、第10回ロハス工学シンポジウム「ロハスの家群跡地再生プロジェクト第1回報告会」において、「ロハスの家群跡地再生プロジェクト・グランドデザイン」と題して講演した。
- 浦部智義教授は、11月8日に行われた、第8回サステナブル地域づくりフォーラムにおいて、「本学部の復興知イノベのこれまでとこれから——概要と『交流の場』について——」と題して講演した。
- 速水清孝教授は、11月19日、『世界建築史15講』編集委員会 + 彰国社主催、『世界建築史15講』連続セミナー 第9回で「日本の建築家と建築士制度」の演題で講演した。(オンライン)
- 浦部智義教授が参加した、特別鼎談「子どもの心とからだを育み持続可能な未来を作る県産木材」が、11月25日に発刊された「ふくしまの家づくりの本2022年版」に掲載された。
- 橋本悠衣さん・横山溪太さん(市岡研・4年次生)を中心に、市岡綾子専任講師と市岡研究室が矢吹町で実施している「よりみちプロジェクト」が、11月29日付福島民報で紹介された。
- 浦部智義教授は、12月10日に行われた、日本建築学会関東支部茨城支所「環境セミナー」において、「3.11後の福島県内の応急仮設住宅の建設から移設再利用について——ログハウス型の応急仮設住宅を中心に——」と題して講演した。
- 齋藤俊克准教授は、12月13日、福島県よりうつくしま、エコリサイクル製品認定審査会委員を再度委嘱され、会長代理に選出された。(任期は令和5年10月31日まで)
- 山田義文専任講師は、1月、郡山市より、第1層協議体構成員に選任された。
- 浦部智義教授は、復興知イノベ事業「産学官民の連携による「ロハスコミュニティ」の構築と実装」の日本大学工学部代表として、1月29日に富岡町の分科会、1月31日に葛尾村の大学連携会議において2021年度報告を行った。
- 奥山翔太君(浦部研M2)を代表とする浦部研究室の学生チームは、福島県の令和3年度森林自己学習支援事業に「庭づくり(外構)ワークショップ」で取り組み、1月31日に完了報告を行った。
- 市岡綾子専任講師と市岡研究室は、2月1日発行の富岡町本町中央地区高齢者散歩マップ制作に関わるまちあるきWSに参加、増田隼さん(市岡研・4年次生)はマップのイラストを制作した。
- 速水清孝教授は2月18日、日本建築学会東北支部シンポジウム(建築史・意匠部会)『建築の作者 建築をつくるのはどんな人か』で「建築士の資格から見た建築家という職業」の演題で発表した。(オンライン)
- 増田隼さんと橋本悠衣さん(市岡研・4年次生)は、富岡町に3月に開所する特別養護老人ホーム桜の園における居室表札に関するサインデザインを行った。
- 川崎浩長君(バリアク研M2)が2021年度日本建築学会大会(東海)学術講演会材料施工部門において「バクテリアを添加したモルタルのひび割れ自己治癒性能に関する基礎的検討」という題目で若手優秀発表賞を受賞した。
- 川崎浩長君(バリアク研M2)が一般社団法人全国コンクリート製品協会 コンクリート製品検定2021にて初級に合格した。
- Sanjay PAREEK 教授が財界ふくしま3月号の「県内大学リレー寄稿 フクシマの未来像」に「第73回 最先端建設材料と技術によるSDGsへの貢献」という題名で寄稿した。

編集後記:特集は「コンペと卒業設計」です。今回コンペに参加した幾人かの学生に話を聞きました。その誰もが楽しそうに話ってくれました。何か目標に向かって努力することの充実感・達成感に他に得がたいものと改めて感じました。(山岸)

お願い:編集室までご意見・ご感想をお寄せください。  
ceb.soukon@nihon-u.ac.jp